

ロラン・バルト

花輪 光訳

文学の記号学

コレージュ・ド・フランス開講講義

LEÇON

Le texte de la leçon inaugurale
prononcée le 7 janvier 1977 au
Collège de France. Du pouvoir
inscrit dans la langue comme code,
à ce qui dans la langue même l'es-
quive : la littérature. Et du signe
comme objet de science autorisée
comme plaisir d'être
imaginativement

みすず書房

文学の記号学

コレージュ・ド・フランス
開講講義

ロラン・バルト

花輪 光 訳

みすず書房

ロラン・バルト

文学の記号学

コレージュ・ド・フランス開講講義

花輪 光 訳・解説

1981年8月10日 印刷

1981年8月20日 発行

発行者 北野民夫

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15

電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京0-195132

本文印刷所 三陽社

扉・表紙・カバー印刷所 東京美術印刷社

製本所 鈴木製本所

© 1981 in Japan by Misuzu Shobo

Printed in Japan

ISBN 4-622-00483-6

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

文学の記号学……………	3
-------------	---

〔訳者解説〕

文学の復権——ロラン・バルトの開講講義『文学の記号学』をめぐって……………	59
---------------------------------------	----

文学の記号学

コレージュ・ド・フランス

講座「文学の記号学」開講講義

一九七七年一月七日

おそらく私は、まず、つぎのように自問してみるべきなのであろう。いったいどんな理由によって、コレージュ・ド・フランスは、このような不安定な人間、その特質の一つ一つが反対の特質といわば伯仲している人間を迎え入れる気になったのか、と。というのも、私はこれまで大学教師をつとめてきたが、しかし、一般にこうした職業につくための資格をもちあわせていないからである。それに私は、文学や語彙論や社会学などの学問分野で業績を残したいと長いあいだ望んできた、それは本当であるが、しかし私が生み出したのは、エクリチュールが分析と覇を競いあう曖昧なジャンルと

しての、エッセーにすぎなかった、ということもたしかに認めざるをえない。それにまた私は、なるほど非常に早くから自分の研究を、記号学の誕生と発展にかかわらせてきたが、しかし私には、記号学を代表する権利がほとんどない、ということもまた本当なのである。なにしろ私は、記号学が成立するように見えると、すぐに記号学の定義を変えようとしてきたし、また、記号学的研究の活発さを世界中で証明している数々の雑誌よりも、むしろ「テル・ケル」誌に近い立場にあって、現代性の突飛な力に頼ろうとする傾向が強かったからである。

それゆえ、科学と知と厳密さと学問的創意とが支配するこの殿堂に迎えられたのは、明らかに不純な人間なのである。そこで、慎重を期するために、あるいは、自分の喜びを検討することによってしばしば知的困惑を切り抜けようとする、自分の性向に従って、私は、コレージュ・ド・フランスが私を迎えるようになった理由は問わず——というのも、私から見ると、その理由は確実でないからである——、この場所に入る

ことが、私にとって名誉である以上に喜びであるのはなぜか、その理由を述べることにしたい。というのも、名誉はときにふさわしくないことがあるが、喜びには決してそのようなことがないからである。私の喜びはといえば、コレージュ・ド・フランスでかつて教えたり、現に教えている、私の好きな作家たちの、思い出や姿にここで接しられるということである。もちろん、まず、ミシュレがいる。私が知的生活のそもその初めから、人文諸科学のなかにおける「歴史学」の至高の地位を知り、さらにまた、知がエクリチュールに巻きこまれることを承知するとき、エクリチュールがどれほどの力をもつかを知ったのは、彼のおかげである。つぎに、もっと時代が下がると、ジャン・バリュジやポール・ヴァレリーがいる。まだ若かった頃、私はこの同じ教室で彼らの講義を聴いたことがあった。それから、さらに時代が下がると、モリス・メルロー、ポンティやエミール・パンヴェニストがいる。そして現在については、当然の慎みとして、自分と親しい人たちの名は言わずにおくべきところであるが、

私が友情と知的連帯と感謝の念によって堅く結ばれているミシェル・フーコーの名は、例外としてお許し願いたい。というのも、「教授会」に対して、この講座ならびにその担当教授を推薦してくれたのは、ほかならぬ彼だからである。

きょう、私が感じているもう一つの喜びは、より多くの責任をとまうだけに、なおいっそう重要である。それは、まぎれもなく権力の外にあると言える場所に迎えられた喜びである。というのも、もし私の側から解釈することが許されるなら、コレージュ・ド・フランスは、教育機関の世界にあって、いわば「歴史」のこの上もない策略の一つであると言えるからである。一般に、名誉というものは、権力の残り滓であるが、ここでは名誉が権力からの自由、権力の及んでいない部分となっている。ここでは教師は、ただひたすら研究し語る——いや、あえて言うなら、自分の研究を夢見ながら寝言を言う——声高に語る——以外、何の活動もおこなわず、判定することも、選別することも、進級させることも、管理された知に仕えることもない。文学的教育

が、専門技術的要請の圧力と学生たちの革新的要求とに引き裂かれ、疲弊している現在、これはとほうもない特権、ほとんど不当とも言える特権である。しかしおそらく、いかなる制度的裏づけもなしに、ただ教え語ることこそ、問題なくいっさいの権力をまぬがれた活動である、ということにはならないであろう。たとえ権力の外にある場所から語ったとしても、およそ言説には、権力（支配欲 *libido dominandi*）がひそんでいるのである。そこで、この授業が自由なものであらうとすればするほど、ますますつぎのように自問することが必要であらう。いったい、いかなる条件のもとで、いかなる操作によって、言説は、いっさいの占有欲からのがれることができるのか、と。私の見るところでは、この問いかけこそ、きょう開講されたこの授業の根本的な企図をなすものなのである。

■

実際、この授業において、これから間接的に、しかし執拗に問題になるのは、権力である。現代の《無邪気な連中》は、権力が一つのものであるかのように、それについて語っている。つまり、一方に権力をもつ人々、他方にそれをもたない人々がいる、というわけである。権力はこれまで、典型的な政治的対象であると考えられてきた。いまでは、権力はイデオロギー的な対象でもあって、最初はその声が聞きとれなかった場所、教育機関や授業のなかにもしのびこんでいる、と考えられるようになったが、しかし要するに、権力は依然として一つである、と考えられているのだ。けれども、

権力は、悪魔と同じように複数ではないのか。《わが名はレギオン、〔われら多きがゆえなり〕》〔マルコ伝〕、と権力は言うことができるだろう。なにしろ、いたるところ、あらゆる方面に、さまざまな首長、巨大な組織や微細な組織、圧制的な団体ないし圧力団体が見られ、いたるところで、《權威をおびた》声が、きわめて権力的な言説を、傲慢さから発する言説を、はばかることなく聞かせているからである。われわれはそこで、権力は、社会的交流のきわめて些細な機構のうちにも存在する、ということを知る。権力は、単に国家や社会階級や集団のなかだけでなく、流行、世論、映画演劇、遊び、スポーツ、報道、家族関係、個人的交友のなか、さらには、権力に異議をとないようとする解放の動きのなかにさえ存在するのだ。私が権力的言説と呼ぶのは、言説を受けとる側の人間に誤ちがあるとし、したがって、罪があるとするような言説のすべてである。ある人々は、われわれ知識人があらゆる機会に「国家権力」に反対して行動することを期待している。しかし、われわれの真の戦いはほかにある。真の戦

いは、複^い数の権力に対するものであって、それこそ容易な戦いではない。というのも権力は、社会的空間においては複数的であり、歴史的時間のなかでは、それと対称的に、永続的だからである。権力は、こちらで追放され、衰えたかと思うと、あちらにふたたび現われる。権力は決して滅びないのだ。権力を打破するための変革をおこなっても、権力はたちまち、新しい事態のもとでよみがえり、芽をふきかえすだろう。権力がこのように持続し遍在するのは、権力が、社会の枠を越えたある組織体に寄生しているからである。その組織体が、単に政治の歴史や有史以後の歴史だけでなく、人間の来歴全体と密接に結びついているからである。人間が存在しはじめて以来ずっと権力が刻みこまれているこの対象こそ、言語活動^{ランガイジュ}である——あるいはもっと正確には、言語活動の強制的表現としての言語^{ランゲ}である。

言語活動は立法権であり、言語はそれに由来する法典である。われわれは、言語のうちにある権力に気づかない。というのも、およそ言語というものはすべて分類にも

とづき、分類というものはすべて圧制的である、ということ忘れてゐるからである。ordr (秩序、命令) という語は、分類区分することと同時に威嚇を意味する。ヤーコフソンが指摘しているように、ある一つの特有言語は、それが言うことを可能にする事柄によってではなく、むしろそれが言うことを強制する事柄によって定義される。われわれのフランス語にあっては（これは大ざっぱな例にすぎないが）、私はまず自分を主語「主体」として立て、つぎに行為を述べることを強いられる、その結果、行為は私の述語「属性」にすぎないことになる。私の行為は、私の存在の論理的帰結であり、かつ、それに続いておこるものにすぎなくなる。同様にして、私は常に男性か女性を選択しなければならない。中性や複合的な性は禁じられているのだ。また同様にして、私は、二人称代名詞 *tu* (親しい相手だ) または *vous* (普通の二人) を用いることによって、相手との関係を表示しないわけにはいかない。感情的、社会的に中途半端でいることは許されないのである。このようにして言語は、その構造自体によって、宿命

的な疎外関係をもたらす。話すこと、ましてや論ずることは、あまりにもしばしば繰り返し言われているように、伝達することではない。それは服従させることである。言語全体は、一個の全面的な制辞法なのである。

ルナンの言葉を引用しよう。彼はある講演でこう言っている。《皆さん、フランス語は、決して不条理なことを言うための言語とはならないでしょう。それはまた、決して反動的な言語とはならないでしょう。フランス語を表現手段としてもつ真剣な反動など、私には想像することもできません》と。たしかに、ルナンは、彼なりに炯眼だった。彼が見抜いていたように、言語は、メッセージを生みだして消えてしまうものではない。言語はそうしたメッセージのあとまで生き残り、メッセージが伝えるのとは別のことを、メッセージにこめて、しばしば恐ろしい調子で聞かせることができる。語る主体の意識的、理性的な声の上に、さらに言語構造の支配的な、頑固な、抵抗しがたい声、つまり、語る存在としての種の声をかぶせるのである。ルナンの誤